

令和4年度 研究紀要 (web 版)

子どもを支える保育

～ 評価を通して(4年次)～



上越教育大学附属幼稚園

もくじ

1	—	1	研究概要
1	—	2	アウトカムプロセス
1	—	3	検討プロセス
1	—	4	研究ヒストリー
2	—	1 — 1	3歳Ⅰ期エピソード
2	—	1 — 2	3歳Ⅰ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	2 — 1	3歳Ⅱ期エピソード
2	—	2 — 2	3歳Ⅱ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	3 — 1	3歳Ⅲ期エピソード
2	—	3 — 2	3歳Ⅲ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	4 — 1	3歳Ⅳ期エピソード
2	—	4 — 2	3歳Ⅳ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	5 — 1	4歳Ⅴ期エピソード
2	—	5 — 2	4歳Ⅴ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	6 — 1	4歳Ⅵ期エピソード
2	—	6 — 2	4歳Ⅵ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	7 — 1	4歳Ⅶ期エピソード
2	—	7 — 2	4歳Ⅶ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	8 — 1	4歳Ⅷ期エピソード
2	—	8 — 2	4歳Ⅷ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	9 — 1	5歳Ⅸ期エピソード
2	—	9 — 2	5歳Ⅸ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	10 — 1	5歳Ⅹ期エピソード
2	—	10 — 2	5歳Ⅹ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	11 — 1	5歳Ⅺ期エピソード
2	—	11 — 2	5歳Ⅺ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
2	—	12 — 1	5歳Ⅻ期エピソード
2	—	12 — 2	5歳Ⅻ期エピソード (やっぱりそうだね納得版)
3			今年度の研究を通して

研究概要

1 研究テーマ

子どもを支える保育～評価を通して（4年次）～

－教師の「まなざし」に着目した評価を通して、援助の在り方を見つめる－

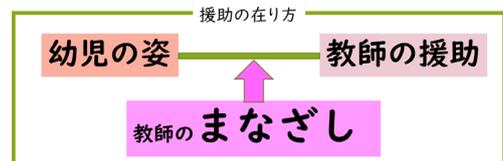
2 研究テーマについて

(1) これまでの研究とのつながり

令和元年度より、研究テーマを「子どもを支える保育～評価を通して～」と設定して研究を進めてきた。1年目は、保育を評価する仕組みを整えた。日々の保育記録やカンファレンスなど、4つの取組をもとに振り返りのサイクルを充実させ、保育改善を進めることによって、個々の保育の捉えに方向性があることが見えてきた。2年目は、「こんなふうに育てほしい」と考える姿に照らして、教師が行った援助や環境構成などが幼児の育ちや学びを支えるものになっていたか、またはそのための改善になっていたのかを判断する考え方、すなわち保育の評価観を見出した。7つの評価観を捉えることにより、保育を語る上での共通認識と共通性を見出すことができた。3年目は、4つの取組に沿って保育を評価していくサイクルの実践を通して、評価観を捉え直し、外部の視点を入れた評価を得ながら、より確かなものにしてきた。評価観は、常に更新されていくものであり、保育を評価する上で大切にしたいのは、「語り、考え続けるプロセス」であるという新たな共通認識が得られた（右図）。また、交流を通して、本園の保育の評価の妥当性を確かめることができた。



日々のカンファレンスで最も話題になったのが、目の前の幼児の姿をどのような援助によって支えるかという「援助の迷い」であった。カンファレンスでは、「待つ」「種をまく」などの援助が、キャッチフレーズのように語られてきた。しかし、それらの援助が育ちを支えることにつながっている文脈については、個々の教師の勘や経験則、それぞれのエピソードにより異なる。教師の援助が幼児の育ちを支えるためには、どのように幼児の姿を読み取り、どのような育ちを願うのかという教師の見方や考え方、つまり「まなざし」をもって保育をしているのではないかと考えるようになった。教師が「まなざし」を視点に語り合うことで、全職員がどう子どもを支えているか実感をもって捉えることができ、よりよい「援助の在り方」を見つめることにつながるのではないかと考えた。



(2) 近年の幼児教育の動向から

令和2年5月に出された「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」の中間報告書では、幼児教育の質の向上の実現に向けて、6つの柱に沿った具体的方策が提言された。その一つの柱である「幼児教育の質の評価の促進」では、「各園の独自性を確保しつつ、質の高い幼児教育を提供するためのPDCAサイクルの構築」の必要性を述べている。このPDCAサイクルの構築とは、保育の計画（P）を出発点として、計画に基づいた保育を实践（D）し、その計画の確認（C）と改善（A）を継続的に行うことで、保育の質を高めていくという循環モデルの構築であ

る。このサイクルは、本園が3年次までに整えてきた保育の評価の仕組みであると捉えることができる。

一方で、近年の教育界において、場の状況に合わせた柔軟な意思決定を行っていくための考え方として注目されつつあるのが、「OODA（ウーダ）ループ」である。もともとは、米軍の意思決定プロセスを理論化したものであり、柔軟かつ迅速な意思決定の流れが4つのプロセス（Observe（観察）、Orient（方向付け・情勢判断）、Decide（決断）、Act（行動））に分かれている。このプロセスにおいては、観察の段階を前提として、現状に合わせた最適な判断を繰り返すことに特徴がある。幼児教育に置き換えると、目の前の子どもの姿の読み取り（O）を出発点として、教師が子どもの育ちを願い（O）、援助を決めて（D）実行（A）することが繰り返されると捉えることができる。

幼児教育は、目の前の子どもの姿の読み取りから育ちを支える経験カリキュラムであるといえる。幼児の読み取りは、目の前の幼児の姿により常に更新し続けるものであるため、教師の計画通りの育ちを支えることに必ずしも向かうとは限らない。そこで、目の前の幼児の姿や育ちへの願いを大切にしたいOODAループの考え方と、本園が3年次までに整えてきたPDCAサイクルによる評価を組み合わせて運用していくことで、より質の高い保育の評価につながるのではないかと考えた。これらを組み合わせた評価により、目の前の幼児の読み取りや育ちへの願いにより着目した評価、すなわち、「まなざし」に着目した保育の評価を促進したいと考えた。

（3）研究の目的

4年次研究では、より質の高い保育の評価を目指し、教師の「まなざし」に着目した保育の評価を通して、よりよい援助の在り方を見つめることを目的とする。

3 研究計画

4月～5月（Ⅰ期）

教師が大切にしている援助の方法の確認

カンファレンスにおける教師の「まなざし」の集積、整理①

研究保育の実施

6月～7月（Ⅱ期）

カンファレンスにおける教師の「まなざし」の集積、整理②

保育園・幼稚園・こども園との交流による妥当性の確認

8月

小学校教諭との交流による妥当性の確認

9月～12月（Ⅲ期）

カンファレンスにおける教師の「まなざし」の集積、整理③

研究保育・研究会の実施

保育園・幼稚園・こども園との交流・小学校教諭との交流による妥当性の確認

1月～3月（Ⅳ期）

カンファレンスにおける教師の「まなざし」の集積、整理④

整理された「まなざし」の分析

研究のまとめ

4 研究方法（第4年次）

（1）「まなざし」を語り合うカンファレンス

教師の「まなざし」にかかわる事例を蓄積していくため、「水曜カンファレンス」や、「のびのび保育シート」「やっぱりそうだね納得版」を基にしたカンファレンスを行う。教師の「まなざし」が幼児を支える文脈を言語化し、職員一人一人がその援助を行うに至った背景にある幼児

の読み取りや、育ちへの願いを知ることにより、その援助の方法が実感の伴う言葉となって共有されることを期待する。また、「待つ」「種をまく」などの本園で語られてきた援助への捉え方の違いを議論することで、「まなざし」や援助の在り方への認識を広げるきっかけにしたい。

(2) 蓄積した「まなざし」の整理・分析

よりよい援助の在り方を見つめるため、「待つ」「種をまく」などの援助の方法ごとに集積されたエピソードを、「読み取り」「願い」「判断」「援助」の4つの視点で整理する。どのような願いによりその援助の方法が行われているのかを可視化し整理していくことで、援助の在り方を見つめる上で核となる考え方や、まなざしをもって語り合うことの意義について考察していく。

(3) 小学校や他園との交流による意見交流による妥当性の確認

よりよい「援助の在り方」について、広い文脈で検討していくために、外部との交流を行う。ある程度、「援助の在り方」が検討された段階で、市内の幼稚園・保育園・こども園の職員から、どう受け止められるのか交流を行い、その妥当性を検討する。また今年度は、小学校の教員との意見交流も新たに行い、本園での「援助の在り方」が、幼小の連続した育ちや、育みたい資質・能力の共有につながることを確認していく機会としたい。

(4) 大学教員との連携による研究推進

本学幼年教育領域の教員からの指導・助言を受けながら研究を進めていく。保育実践者である本園教師と研究者である大学教員の双方が意見を述べ合うことで、よりよい援助の在り方を見いだしていくことができると考える。研究の進め方や事例の捉え方について、大学教員の意見を聞きながら保育実践や資料の集積を進めていく。

(5) 研究保育と研究会の実施

今年度も研究協力者以外にも広く保育を公開し、参観者や研究協力者から保育についての意見や本園の研究について助言を得る。また、以下の日程で幼児教育研究会を実施し、参会者や研究協力者からの意見をもとに、保育や研究の方向性について考える機会とする。

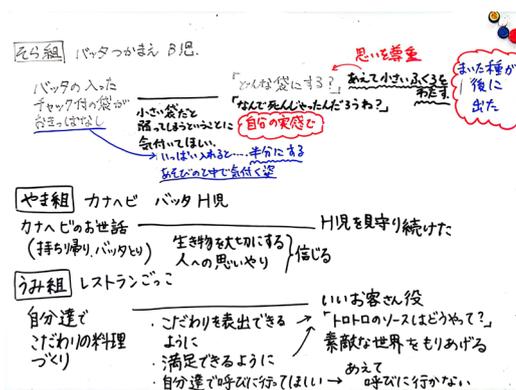
5月25日(水)	第1回研究保育(公開保育・協議会、研究協力者会議)
9月14日(水)	第30回幼児教育研究会① 第2回研究保育(公開保育・協議会、研究協力者会議)
9月30日(金)	第30回幼児教育研究会②

5 研究の実際(第4年次)

(1) 「まなざし」を語り合うカンファレンスから見てきたこと

水曜カンファレンスの際に、全職員で「普段している援助」を振り返り、付箋に書き出してみた。これらを整理してみると、「待つ」「種をまく」などの援助が主に挙げられた。これらは、子どもを中心に据えた援助であり、その背景には「子どもの読み取り」があるのではないかと共有した。また、職員からは、「私たちって、『しない』援助が多いよね」という感想が挙がった。なぜ、普段の援助を「しない援助」と感じたのか、「まなざし」に着目していくことで、見つめ直していきたいという思いにつながった。

今年度、週の記録である、のびのび保育シートを基に、教師の「まなざし」に着目したカンファレンスを週1回実施した。このカンファレンスでは、日



のびのび保育シートを基にしたカンファレンスの記録

けをつくる援助をしているからこそ、幼児を信じて待ったり見守ったりすることが多くなるのではないかと話し合った。また、援助をする教師は、受け入れる、共感する、などの幼児への「心の寄り添い」があるということも確認した。援助を行う教師の願いの根底には、「幼児の育とうとする力を支える」という評価観があることが共有された。

これらの検討を受けて、4月のカンファレンスで話題になった「しない援助」とは、少しだけきっかけをつくって待つことや見守ることが多く、直接何かをつくってあげる、できないことを教師がしてあげるといったことが少ない、ということではないかと共有した。

現在、育ちへの「願い」をさらに分析したり、カンファレンスを重ねたりしながら、よりよい援助の在り方について見つめているところである。

(3) 小学校や他園との交流から見てきたこと

8月、「拡大カンファレンス」と題し、私立保育園保育士、公立小学校校長・教頭、公立中学校主幹教諭、上越市教育委員会指導主事など、違う校種や立場の方とのカンファレンスを行い、本園の援助の在り方をどう考えるかについて語り合った。本園の「まなざし」は肯定的な幼児理解が基本にあること、小学校と幼稚園ではまなざしの違いがあり、本園のような「まなざし」をつないでいくことが大切であるという意見が得られた。教師の「まなざし」を語り合うことの価値を再確認することができた。



また、「私たちの園の子どものことは私たちの言葉で語る大切である」という意見をいただいた。言い換えると、私たちが「まなざし」を語り合う際には、自分の保育に最も合う言葉で語ることで、大切にしたいことが見えてくるのではないかとということである。この意見を受けて、職員一人一人が今の「まなざし」についての捉えを言語化し、語り合った。「子どものありのままを捉えようとするまなざしが多い」「職員全員が子どもを肯定的に捉えようとしている」「自分の『まなざし』とみんなの『まなざし』がほとんど同じで、すごく安心した」「何となく、全て同じに感じる」などの意見が出された。一人一人の「まなざし」の捉えは違えど、「肯定的、ありのままを受け止める」といった方向性が同じであることが共有された。一人一人がそれぞれのまなざしをもちながらも、同じ方向を向いて保育しようとしていることは、カンファレンスを重ねてきた成果ではないかと捉えた。

9月、「まなざし」に着目した保育の評価が、外部の方からどう捉えられているのか、どのような価値があるのかについて、研究協力園の保育士2名との意見交流を行った。本園の「まなざし」は、「子どもを想う気持ち」が根底にあるのではないかと意見をいただき、自ら育とうとする子どもを支えようとカンファレンスを繰り返してきたその原動力は、「子どもを想う気持ち」ではないかと共有した。また、言葉になりにくい「まなざし」を言語化してきたことについて、「一度言葉にしてみることで大切なことが自覚できてよい」「自園でも『まなざし』についてのカンファレンスをやってみよう」という共感的な意見が得られた。



一度限りの意見交流にとどまらず、継続的にカンファレンスを行うことで、「まなざし」に着目した保育の評価やよりよい援助の在り方について、広い文脈で捉えていく機会としたい。そこで、今後も研究協力園との意見交流や、校種を超えて語り合う「拡大カンファレンス」を継続して実施していく予定である。また、まなざしを言語化し、共有可能なものにしてきたことを、広く共有することにつなげていく。どのように共有・交流ができるかについても、引き続き模索していく。

アウトカムプロセス

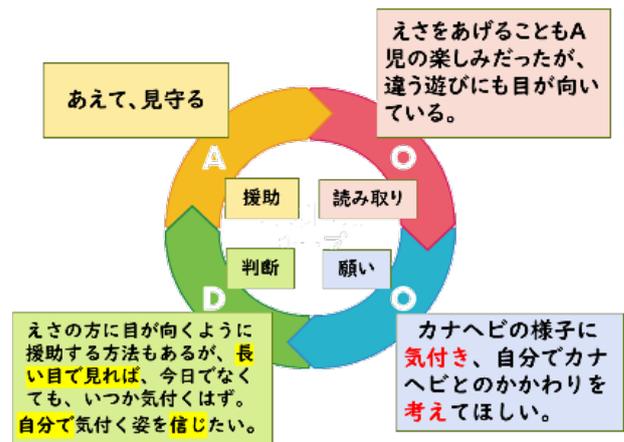
3年間の研究を通して、「保育記録」「のびのび保育シート」「カンファレンス」「期の振り返り」の4つの取組の継続、評価観の更新、公立・私立の幼稚園、保育園、こども園との交流により、保育を評価するしくみを確かなサイクルとして位置付けてきた。

保育を評価するしくみに基づいて共有していく過程で、何となく伝わっているだろうという、暗黙知があることに気付いた。そこで、今年度は暗黙知となっていた援助について、記録をもとに言語化し、援助の在り方を見つめてきた。また、他園・他校種の職員と交流し、広い文脈で援助の在り方を捉えてきた。研究の取組と、見えてきた成果について示す。

暗黙知① 教師の「まなざし」

保育は待たなしの営みである。日々の振り返りによって計画したことが、少しのきっかけで変わってしまうことがよくある。教師は目の前の幼児をどのように見て援助をするのか、その見方を教師の「まなざし」と呼ぶことにした。この「まなざし」をOODAループの視点（読み取り・願い・判断→援助）を手がかりに言語化してきた。

右図は、4歳児クラスのA児が初めて捕まえたカナヘビのえさを探しているうちに、違う遊びに興味をもったときの、教師の「まなざし」を言語化した事例である。言語化することを通して、幼児の心の動きを肯定的に捉えて読み取っていること、「自らしてほしい」「自信をもってほしい」「かかわりをもってほしい」という願いがあること、今すぐの解決よりも、長期的な育ちにつながるように幼児を信じて判断し、援助の方法につなげていることが見えてきた。言語化する過程では、これまで何となくもっていた願いや何となくしていた判断が顕在化し、「幼児への見方が耕された」という教師の手応えにつながった。個々の教師の言葉かけの仕方や考えていることは当然違うが、教師の「まなざし」を共有可能なものにしてきたことで、それぞれの教師の持ち味が見えてくるとともに、保育の方向性が揃っていることも確認する機会となった。



暗黙知② 援助への捉え

カンファレンスでは、「待つ・見守る」「つなぐ」などの援助がキャッチフレーズのように語られ、その捉えも様々であった。転出入で職員が半数以上入れ替わった今年度、援助の言葉がもつ意味について、事例をもとに言語化し、共有可能なものにしてきた。

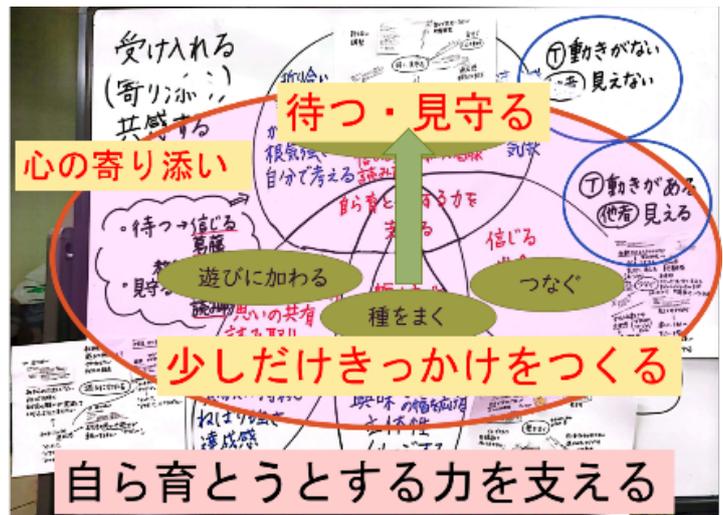
これまで、「つなぐ」援助は、主に異年齢の幼児がかかわるきっかけをつくることを意味する言葉として語られてきた。カンファレンスで、各クラスでの教材の種類や、教材を使う環境のつくり方、教材を渡すときの言葉が話題になったとき、幼児の経験をより一層考慮した教材の選定や、時に教材をあえて出

さないことなどが「つなぐ」援助の前提になっていることが共有された。「つなぐ」援助は、幼児と幼児だけではなく、経験をつないだり、環境とつないだりする援助であると、捉えが広がった。

このように、「待つ・見守る」「つなぐ」などの援助の前提には何があるかを共有していく中で、その援助への見方が耕されてきた。幼児の姿や事例と、抽象的になりがちな援助の言葉を照らし合わせ、常に往還しながらカンファレンスを行うことが保育の実感につながった。

暗黙知③ 援助の構造化

「待つ・見守る」援助について事例をもとに言語化していく過程において、援助の在り方にかかわる視座を得ることができた。「つなぐ」「遊びに加わる」など、少しだけきっかけをつくるような援助をしているからこそ「待つ・見守る」援助ができること、その根底には、幼児への心の寄り添いがあること、さらに、待つ援助は、自分で折り合いをつける、自分で考えるなど、本園で大切にしている「幼児の自ら育とうとする力を支える」ことにつながる援助であることが見えてきた。このように、言語化していく過程で、援助が



関連付き、構造化されたことで、「幼児の自ら育とうとする力を支える」という言葉がより実感のある言葉として捉えられた、という手応えにつながった。自分たちがしている援助を、自分たちの言葉で意味付けてきた過程が大切だったと捉えている。

交流を通して見えてきたこと

本園の援助の在り方をより広い文脈で捉えるため、幼稚園・保育園・こども園のほか、小学校、中学校、教育委員会の職員とも語り合う機会を設定した。

今年度、幼稚園・保育園・こども園との交流は2年目となった。「時間が取りにくい状況であったが、カンファレンスの時間を取り入れたことがよりよい援助につながった」「一度、援助について言葉にしてみると保育する上で大切なことが見えてきた」など、本園の取組を参考にした手応えを、交流した園の職員から聞くことができた。本園の援助の在り方や保育を評価する仕組みが他園に伝わりつつあるということが成果として見えてきた。一方で、「個々の職員によって保育への考え方に差があり、園全体として同じ歩調での保育につながらない」という保育現場の課題が新たに見えてきた。一緒に保育をしたり、援助について語り合ったりする機会がほしいという要望もあった。カンファレンスをさらに外部に開いていくなど、今後の交流の在り方についてさらに検討していく必要がある。

また今年度、小学校・中学校・教育委員会の職員との交流を拡大カンファレンスと名付け、8月・12月に行った。本園の援助の在り方を話題にしながら、幼小中の連続した育ちについて語り合った。第1回の交流では、大切にしたい思いや教育観をつなぐことの重要性が共有された。第2回の交流では、その教育観をつなぐための教師の役割や立ち位置、子ども中心のくらしづくりについて語り合った。2回の拡大

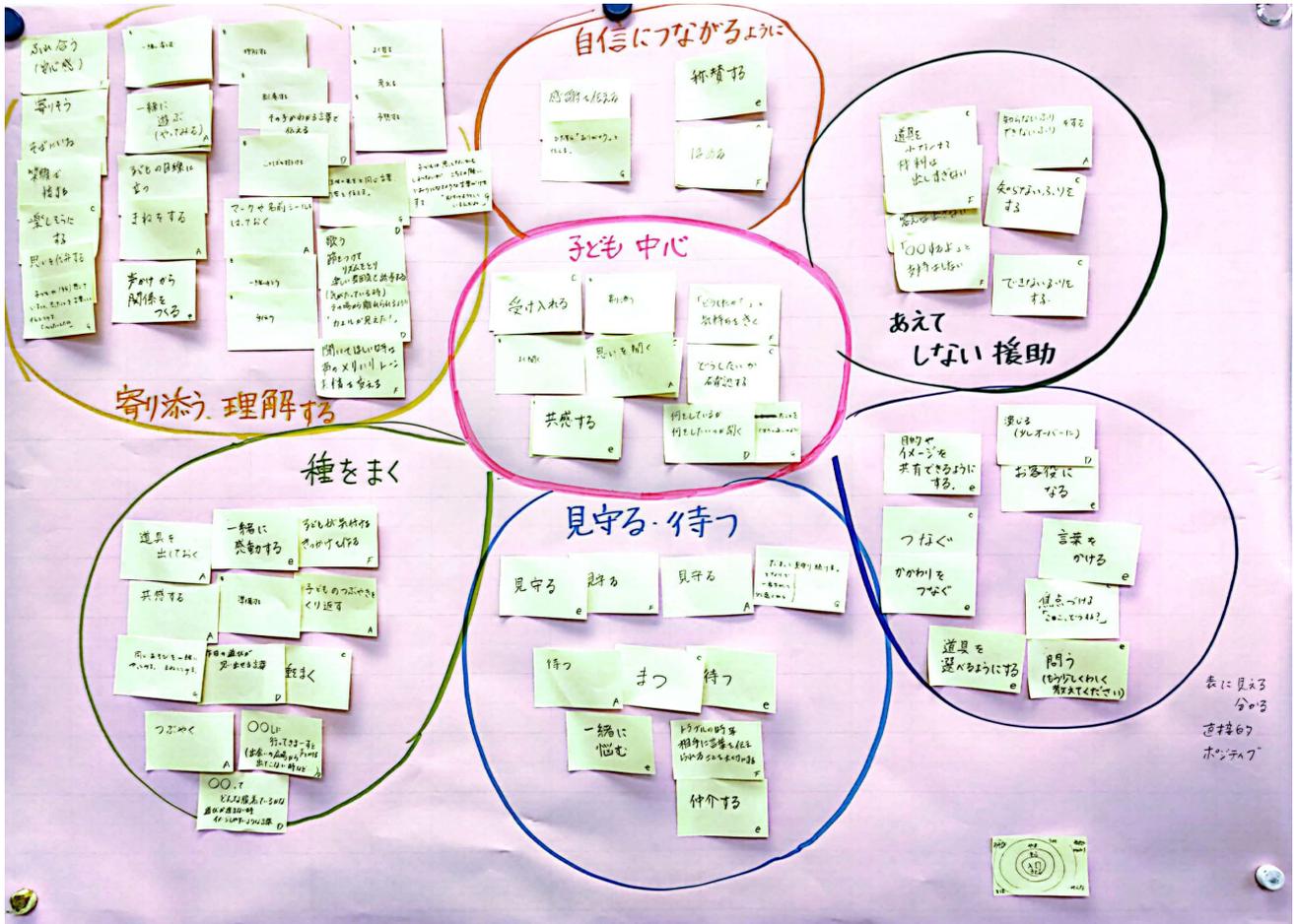
カンファレンスを通して感じたのは、共に語り、考え続けることの重要性である。職員の迷いや悩みを言い合える関係性が、幼児の育ちにつながることでより自覚された。

私たちの保育について暗黙知となっていたことを言語化、構造化して援助の在り方を見つめてきたことで、自分自身の保育のさらなる自覚につながり、「子ども主体の保育を発信したい」という思いにつながったことが、今年度の研究の手応えといえる。本園の保育の発信をしていくことで、地域の幼児教育の質の向上を使命とする本園の在り方についてさらに考え、その仕組みを整えていくことを来年度への課題としていく。

検討プロセス

今年度、援助の在り方を見つめてきた過程を示す。

〈検討プロセス①〉 これまでの援助を振り返る



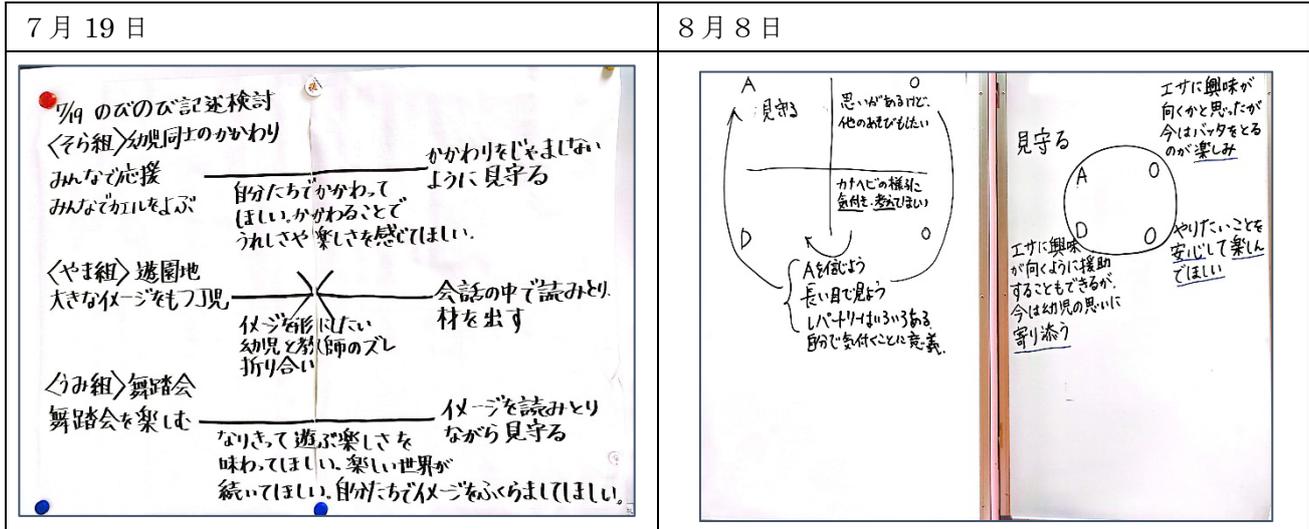
図：援助の言語化

今年度の研究を始めるにあたり、全職員で「普段している援助にはどのような援助があるか」をKJ法的な手法により、上図のように言語化した。「見守る・待つ」「種をまく」「寄り添う・理解する」「自信につながる」「あえてしない援助」に分類され、「子どもの読み取り」が背景にあるのではないかと話し合われた。また、挙げられた援助すべてが、子どもを中心に据えたものであることが共有された。

分類された援助について語り合う過程で、本園の援助は「しない援助」が多いのではないかと気が生まれた。「しない援助」や「見守る・待つ」「種をまく」など、キーワードのように語られる援助の内実は何なのか、今後の研究の中で言語化し、見つめ直していきたいという思いにつながった。

〈検討プロセス②〉 事例を蓄積する

毎週月曜日に「のびのび保育シート」を全職員に配付し、翌日の火曜日に「のびのび保育シート」につ



図：言語化した事例の蓄積

上図のように、事例を蓄積していく中で見えてきたことは、「見守る・待つ」「種をまく」「遊びに加わる」「つなぐ」援助が多いということであった。蓄積してきた事例を「見守る・待つ」などの援助の方法ごとに分け、整理していく必要があると話し合った。また、記録の仕方も更新された。幼児の姿の「読み取り」、育ちへの「願い」、援助に向かう「判断」の観点で分けて言語化していくことで、援助の在り方が見えてくるのではないかとということが共有された。

〈検討プロセス③〉 事例を整理する

見守る・待つ援助	つなぐ援助
種をまく援助	遊びに加わる援助

図：蓄積した事例の整理と分類

蓄積した事例が「見守る・待つ」「つなぐ」「遊びに加わる」「種をまく」援助に分類された。それぞれの援助について、事例を基に言語化していった。

「つなぐ」援助は、他者と一緒にかかわりながら解決策を考えていくことで、自分でやってみようという思いや自信をもつことにつながる援助であると考えた。ひいては「自ら育とうとする力を支える」という評価観につながっていく援助であるといえる。「つなぐ」援助をする教師は、幼児同士がかかわる少しのきっかけをつくる『黒子』のような存在である。少しのきっかけをつくった後も、幼児の心の動きを読み取り続け、幼児の自分でできる力を信じて見守る姿勢が大切だと考えた。

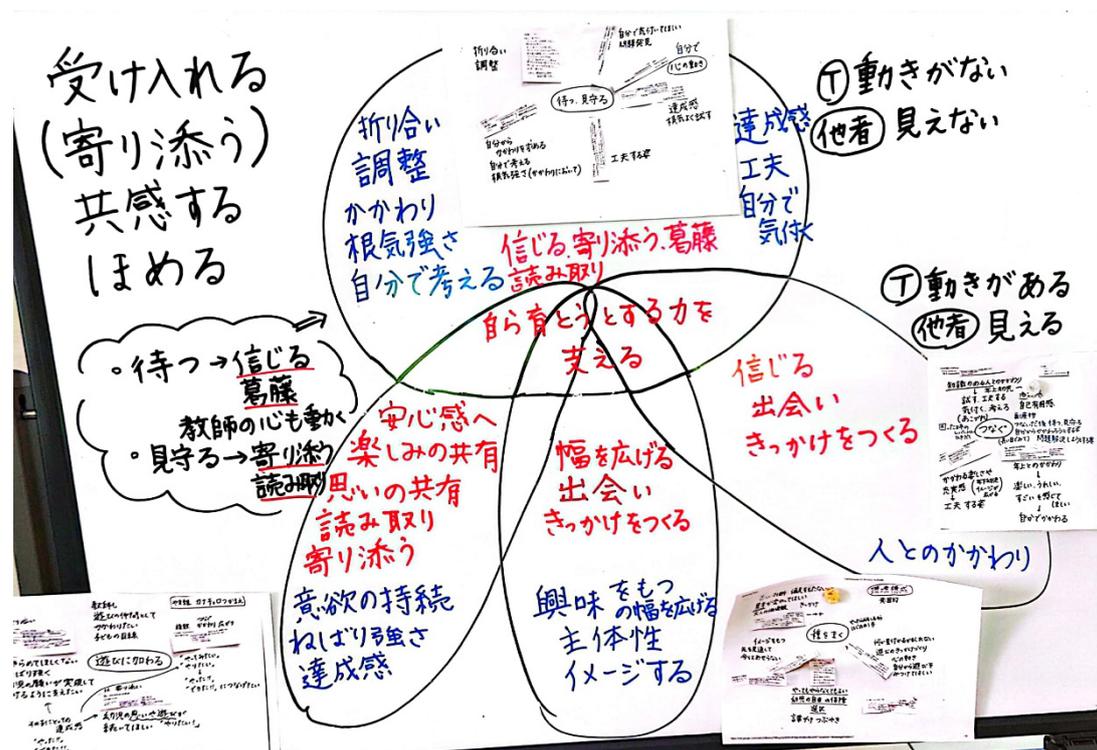
「遊びに加わる」援助は、幼児が安心して遊びを続けたり、自分からやりたいという思いにつながったりするのではないかと考えた。また、教師はそのときそのときで移り変わっていく幼児の思いを読み取り続けることによって、遊びに加わるか判断したり、遊びに加わった際もどのように遊びに加わるかを考えたりしていくことが大切である。

「待つ・見守る」援助は、本園で行っている様々な援助のレパトリーの中でも、幼児の主体性を支えることと密接な関係にある。本園では、「待つ・見守る」援助が多く行われている。これらは他者から見ると、教師の動きが少なく、何もしていないように感じられた。教師の願いが見えにくい援助である。しかし教師の内面では、幼児のこれまでの育ちと目の前の状況、そしてこれから先の育ちへの願いという

複合的な視点をもって、「待つ・見守る」ことが適切ではないかと判断している。待ちながら焦りを感じることもあるが、幼児の自ら育とうとする力を信じて、「今は待とう」と決意している。あえて教師が手を出さない、言葉をかけないことによって、幼児が自分自身で何とかしようと考えたり、何らかの行動に移したりすることにつながる援助であると考えた。

このように援助について言語化していくことを通して、これらの援助には関連性があるのではないかという気付きが生まれた。構造化してみることで、援助の在り方を探っていこうと共有した。

〈検討プロセス④〉 援助を構造化する



図：援助の構造化

上図のような構造化を通して、まず、本園の援助は、「教師の動きがない・他者からは見えにくい援助」と、「教師の動きがあり、他者から何をしているか見えやすい援助」に大きく分けられると話し合った。「教師の動きがない」援助には、「待つ・見守る」がある。「教師の動きがある援助」は、「種をまく」「遊びに加わる」「つなぐ」があり、これらは「少しだけきっかけをつくる援助」であることが共有された。

蓄積した事例を比較してみると、「待つ・見守る」援助が、とても多いことに気付いた。それは、「種をまく」「遊びに加わる」「つなぐ」などの「少しだけきっかけをつくる」援助をしているからこそ、幼児を信じて待ったり見守ったりすることが多くなるのではないかと話し合った。援助をするための前提として、「受け入れる」「共感する」などの幼児への「心の寄り添い」があり、その根底には、「幼児の自ら育とうとする力を支える」という評価観があることが共有された。

構造化する過程では、「あえてしない援助」についても明らかになってきた。「あえてしない援助」とは、少しだけきっかけをつかって待つことや見守ることが多く、直接何かをつかってあげる、できないことを教師がしてあげるということがほとんどない、ということであると共通認識を得た。

〈検討プロセス⑤〉 暗黙知を言語化し、保育にいかす

本園勤務1年目の3歳クラス担任が、保育について語り合う中で遊びに使う素材についての暗黙知に気付いた。3歳クラス担任がカンファレンスなどを通して暗黙知を言語化し、保育に生かしていった事例の記録を、以下に示す。

<p>【9月下旬】 暗黙知に気付く</p>	<p>3歳クラスに木の実を使った色水遊びに夢中になっている幼児がいた。色が出る楽しさを味わえるように透明なプラスチックコップを用意した。職員室で副担任と色水遊びについて話をしていると、他の職員から昨年までは3歳クラスでプラスチックコップを使っていなかったことを聞き、驚いた。幼児の思いに合わせてこの素材を用意することが、幼児の遊びを支えることになると思っていたからである。このことがきっかけで、なぜこれまでプラスチックコップを出していなかったのか、保育者がどんな思いで素材を出しているのかを実はよく知らずにいたことに気付いた。</p>
<p>【10月上旬】 暗黙知を 言語化する</p>	<p>この迷いを他の職員に話すと、水曜カンファレンスの時間に各クラスで用意している素材を見て回るようになった。語り合う中で、3歳クラスで、プラスチックコップを用意していなかったのは、3歳クラス児にとって扱いやすく、自分で見付けてくることのできるような素材が他にあるからであると気付いた。また、3歳クラス児が年上の幼児に「貸して」と思いを伝えるかかわりが生まれるとも考えた。このように、経験やかかわりを意識していたから、あえてプラスチックコップは出していなかったのだということが分かった。</p>
<p>【10月中旬】 暗黙知が 形式知となり 保育にいきる</p>	<p>4歳クラス児が紙テープと木の実を使ってネックレス屋さんを開いていた。3歳クラスにはない紙テープでつくったネックレスに魅力を感じたのか、3歳クラス児が「やってみたい」と伝えていた。3歳クラスでは出していないものを使った遊びだったからこそ、3歳クラス児と4歳クラス児のかかわりが生まれたのだと考えた。</p> <p>各クラスの素材を見たことで、これまでよりも素材の違いから生まれる他のクラスとのかかわりを意識するようになった。</p>
<p>【10月下旬】 つなぐ援助への 捉えが更新される</p>	<p>5歳クラスではハロウィンの仮装の準備をしていた。そこに3歳クラス児が遊びに行き、「私、ハチになりたい」とつぶやいた。それを聞いた保育者は、5歳クラス児とつなぐことにした。5歳クラス児にハチの衣装をつくってもらい、3歳クラス児はうれしそうに保育室へ戻っていった。この3歳クラス児は、 TENTウムの衣装もつくってもらっていた。しかし、つくってもらった衣装はその後使われることはなく、使い捨てのようになってしまっていた。</p> <p>副担任との振り返りタイムで、この3歳クラス児と5歳クラス児をつなぐ援助が本当によかったのかと話題になった。そこで、その迷いを水曜カンファレンスで、語り合った。カンファレンスを通して、つなぐときは自分でつくりたいと思えるように援助することが大切であると気付いた。</p>
<p>【11月上旬】</p>	<p>プリンセスごっこをしていた3歳クラス児が「ドレスが着たい」とつぶやいた。</p>

<p>暗黙知の言語化が 保育にいきる</p>	<p>そこで、カラーポリ袋を出して、4歳クラスと一緒にいき、ドレスをつくってもらいたい思いが伝わるように幼児同士をつないだ。つくってもらった衣装は、ただ腕と首を通す穴を切っただけの簡素なつくりに見えたが、この幼児は笑顔で着ていた。数日が経ったある日、この幼児が「袋ください」と言いに来て、自分でドレスをつくり始めた。「できた！」と喜びを表していた様子を見て、あえて4歳クラスにつくってもらいに行き、つくる様子を見た経験が自分でやってみたいという思いにつながったのではないかと振り返った。</p>
----------------------------	---

3歳クラス担任の暗黙知への気付きから、素材を出したり、あえて出さなかったりする背景には、保育者の願いがあり、長期的な幼児の育ちを見据えていることが共有された。素材の環境構成も、間接的な「つなぐ援助」になっている。「つなぐ援助」は、幼児と幼児をつなぐだけでなく、経験をつないだり、環境とつないだりする援助であるととらえが広がった。暗黙の了解を言語化することを通して、これまで何となく「こうだろう」と思っていたことの意味が整理され、保育に生かされていることが改めて確認できた。

〈検討プロセス⑥〉 交流から援助の在り方を捉え直す

本園の援助を広い文脈で捉えるため、6月と9月に市内のA保育園の保育士2名を本園に招き、意見交流を行った。本園の「まなざし」は、「子どもを想う気持ち」が根底にあるのではないかという意見をいただき、自ら育とうとする子どもを支えようとカンファレンスを繰り返してきたその原動力は、「子どもを想う気持ち」ではないかと共有した。また、言葉になりにくい「まなざし」を言語化してきたことについて、「一度言葉にしてみることで大切なことが自覚できてよい」「自園でも『まなざし』についてのカンファレンスをやりたい」という共感的な意見が得られた。また、「時間が取りにくい状況であったが、カンファレンスの時間を取り入れたことがよりよい援助につながった」と、本園の取組を参考にした手応えを、交流した園の職員から聞くことができた。

一方で、交流を重ね、多様な意見を聞いていく中で「個々の職員によって保育への考え方に差があり、園全体として同じ歩調での保育につながらない」という保育現場の課題が新たに見えてきた。一緒に保育をしたり、援助について語り合ったりする機会がほしいという要望もあった。カンファレンスをさらに外部に開いていくなど、今後の交流の在り方についてさらに検討していく必要がある。

今年度からの取組として、違う校種や立場の方とのカンファレンス（以下、拡大カンファレンス）を行い、本園の援助の在り方をどう考えるかについて語り合った。

8月の拡大カンファレンスの構成員は、私立保育園保育士、公立小学校校長・教頭、公立中学校主幹教諭、上越市教育委員会指導主事、そして本園職員である。本園の「まなざし」は肯定的な幼児理解が基本にあること、小学校と幼稚園ではまなざしの違いがあり、本園のような「まなざし」をつないでいくことが大切であるという意見が得られた。教師の「まなざし」を語り合うことの価値を再確認することができた。また、「まなざし」を語り合う際には、自分の保育に最も合う言葉で語ることで、大切にしたいことが見えてくるのではないかという意見があった。

12月の拡大カンファレンスの構成員は、公立小学校校長・教頭、上越市教育委員会指導主事、附属小学校1年生担任、そして本園職員である。8月に話し合われたように、校種を超えて教育観をつなぐための教師の役割は何か、子ども中心のくらしづくりの環境をどう整えるかについて語り合った。教師は子

子どもが心を動かすような体験と出会い、学びを自らつくっていきけるような環境を整えることや、子どもの姿を学びとして意味づけ、カリキュラムをつくりかえていくことが大きな役割であることが共有された。

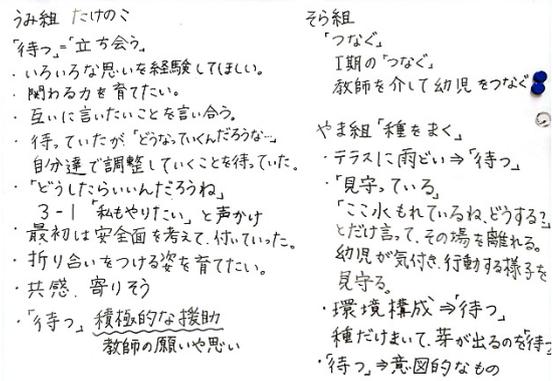
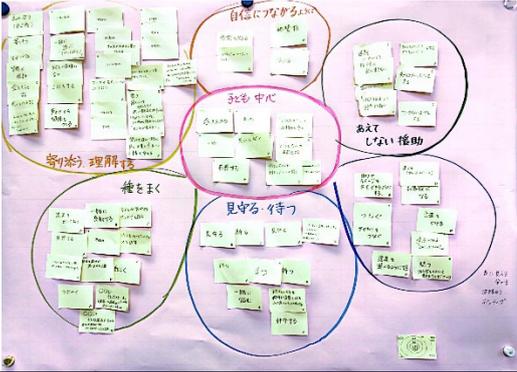
一度限りの意見交流にとどまらず、継続的にカンファレンスを行うことで、「まなざし」に着目した保育の評価やよりよい援助の在り方について、広い文脈で捉えていく機会としたいという意見があった。そこで、今後も研究協力園との意見交流や、校種を超えて語り合う「拡大カンファレンス」を継続して実施していくことを確認した。また、まなざしを言語化し、共有可能なものにしてきたことを、広く発信することにつなげていくことを確認した。

研修ヒストリー

令和4年度 「子どもを支える保育～評価を通して(4年次～)」 研修ヒストリー

ここでは、研修会議やカンファレンスでどのようなことが検討され、どのように援助の在り方をみつめてきたのか、その経緯について示す。

日、場面、参加者	検討事項	検討結果
4月7日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者	・今年度研究のテーマと方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は4年次研究である。3年次までに作り上げた評価の仕組みをさらに発展的に捉え、子どもの育ちが教師の援助によってどのように引き出されているのかを明らかにしていく。 ・他園との交流や附属園の前職員との交流など外部との交流を大切に、附属園だけでなく、他園でも活用できるような研究にしていく。 ・言葉の意味や使い方、その言葉の背景にある教師の願いを言語化し、データを集める。
4月13日 研修 各クラス担任、 養護教諭	・今年度研究の方向性と副題について	<ul style="list-style-type: none"> ・カンファレンスでは、「子どもの姿」「教師の援助」「子どもの育ち」の3つの視点を意識した話ができるようにする。 ・カンファレンス（水曜日）→カンファレンスの振り返り（木曜日）→のびのびシート作成（金曜日）→のびのびシート配付（月曜日）→のびのびシート記述検討（火曜日）というルーティンにしていく。
4月19日 研修 各クラス担任、 養護教諭	・のびのび保育シート記述検討	<ul style="list-style-type: none"> ・のびのび保育シートの記述から、各クラスとも幼児理解を大切にしていることが分かる。遊びを援助することで、楽しい園生活になるようにしていけるようにしていることを確認した。 ・遊びの環境構成、遊び出しの誘い方など迷う場面が多い。遊び出せない子にどこまで声をかけていくのがよいのか。また、何（遊びの材）をどのタイミングでどのくらいの量、出すのがよいのか迷うことが多いということを共有した。
4月27日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員	・今週の保育について	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスとも幼児理解を進めるとともに、幼児との信頼関係を気付けるように援助していること、幼児の実態を踏まえ、試行錯誤を繰り返していることを共有した。
4月27日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者	・今年度研究の方向性や研究方法について	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の目標を明確にするとよい。 ・副題について、4年目である理由が明確に示せた方がよいのではないか。 ・現時点では、事例やエピソードから援助を蓄積して、援助の見える化（言語化）をするプロセスを考えているが、保育で使われている言葉や大事にされている言葉に焦点を当てて、言葉の検討から事例やエピソードを集めていくプロセスでもよいのではないか。 ・何を根拠として、幼児の姿と指導要領の示している「学びに向かう力、人間性等」を結び付けるのか。

<p>5月6日 研修 各クラス担任、 養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 今年度研究の方向性や研究方法について 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの研究とのつながりとして、援助の方法はもうすでに整理させているので、援助の方法ではなく、子どもの事実の捉えを言語化し、育ちの姿を明確にしていくことを確認した。 「捉え」を整理することで、教師の願いが表出し、この園の保育観が出てくるのではないかと。
<p>5月10日 研修 各クラス担任、 養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 研究の概要について のびのび保育シートの検討 	<ul style="list-style-type: none"> 研究の概要について確認した。援助の事例を集積し、分類していくことを共通理解した。 のびのび保育シートの検討 
<p>5月11日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員</p>	<ul style="list-style-type: none"> 普段している援助について 	<ul style="list-style-type: none"> 普段どんな援助をしているかを振り返り、言葉で書き出した。 
<p>5月13日 研修 各クラス担任、 養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> 水曜カンファレンスの振り返り 研究の概要についての検討 	<ul style="list-style-type: none"> 水曜カンファレンスで出された援助の分類ごとの関係性を検討した。 今年度の研究では、出された援助の中からいくつかに焦点を絞って研究を進めていくことを確認した。 どうしてその援助をしたのか、どんな思いや願いがあったのかを言語化し、集積していくことを確認した。
<p>5月16日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者</p>	<ul style="list-style-type: none"> 研究の概要について 資料について 	<ul style="list-style-type: none"> 「まなざし」という言葉は、教師の子どもの姿の読み取りと願いを指す言葉として使用していくことを確認した。「まなざし」は教師の援助の方法とセットで語られることで援助の質をあげていくことにつながるのではないかと。 事例の集積方法やまとめ方など、研究の方法について確認した。 研究協力園との連携をどのように図っていくのかを明確に示す必要がある。

<p>5月18日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員</p>	<p>・今週の保育について</p>	<p>・各クラスの保育の様子を語り、援助の悩みなどを交流した。 ・気になる幼児の様子について、情報を共有し、多くの目で援助していくことを確認した。</p>
<p>5月31日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<p>・研究の方向性の確認 ・期の振り返り、エピソード作成の確認</p>	<p>・研究保育を終えて、今後の研究の進め方を確認した。 子どもの姿—まなざし—援助の形でまなざしや援助を集積していくこと、集積した事例を検討し、まとめていくことを確認した。 ・期の振り返りの手順や方法、エピソードの作成に関わる事項など、今後の予定を確認した。</p>
<p>6月1日 水曜カンファレンス 各クラス担任、預かり保育職員</p>	<p>・正規の保育と預かり保育の連携について</p>	<p>・正規の保育の時間や預かり保育の時間での幼児の様子を情報交換した。また、正規の時間から預かり保育の時間への移行の際に、その日の気になる幼児の様子を口頭で伝えることを確認した。</p>
<p>6月10日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<p>・のびのび保育シーートの検討</p>	<p>5/10 のびのび記述検討</p> <p><そら組> ゴミ 「かざりつけをしない」 種をまく、ゴミを柱に1つぶら下げた ぶら下げない思いを読みとり、イメージできるようにしたいという願い 情報共有</p> <p><うみ組> ケムシ ケムシはやなもの 見つけたケムシの写真をテーブルに置く いろいろなケムシがいる、いろいろなケムシに対する見方がかわるといいという願い 形に残る種まき、図鑑、写真→印刷 心に残る、子どもの思いが、高お、子どもがやったことになる、レポーターが伝えた</p> <p><やま組> かき氷 「かき氷を作りたい」 イメージができている 子どものイメージに近いものにして、他の子にもイメージが伝わるようにしたい→かきわり 思いが高まるまで見守る…タイミングをはかる(待つ) いったい何を出すかの迷い、使えるもの提案 生き物の興味を広がり願った 遊びの持続</p>
<p>6月14日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<p>・のびのび保育シーートの検討</p>	<p>5/14 のびのび記述検討</p> <p><そら組> 雨どい 雨どいの先を 持ち上げる 見守る いろいろなことを試す姿を 読みとり、いつか気付くだろうと思い、自分でやってみて、できた時の方が本人の創言になるだろうと願った。見守った。 心を大きく重かせるように</p> <p><やま組> どん団子 「お団子屋さんをしよう」という子がいた 今は材料の関わりを楽しんでいる お団子(お団子屋さん以外)集(み)があるのか(お団子)かとお読みして、形のよいお団子のイメージができてほしい 教師の思いにあまりひびきがないことも</p> <p><うみ組> 剣スコと裸足 裸足で剣スコを 使っている 安全に遊んでほしいという願い 「何をしたらいい」と声をかける 年長児への声かけ 「何をしたらいい」と声をかける 少なめに、言われた時は制止のニュアンスが強くならないか?</p>
<p>6月16日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<p>・エピソード検討</p>	<p>・今年度も3年次までと同様に、エピソード事例を元に、多くの職員から感想や意見をもらい、納得版を作成することを確認した。</p>

<p>6月21日 研修 各クラス担任、 養護教諭</p>	<p>・のびのび保育シートの検討</p>	<p>6/21 のびのび記述検討 <そら組> ビニールだこ作り 「ひもを長くしたい、うみでんに開きたい」 → うみでんとかがわってほしい、やりとりする経験がほしい、かがわるよさ(楽しい、うれしい、すごい)を実感してほしい つなぐ いろいろな人とかがわる、かがわりの中で遊ぶ、異年齢のつながり、自然に開きに行ける</p> <p><うみ組> ビニールだこ 「先生のたごがほしい」 → 先生に対する思い、自分で作って自分で作るもので遊ぶ楽しさを味わってほしい、あえて進められる「材料ありますよ」</p> <p>作れないから「ほしい」読み取った思い → 自分で作ったうれしさを感じてほしい、自信をつけてほしい、作り方を知らせる、つなぐが必ずしも担任が援助の必要を認め、認められることが大切、1人1人の育ちのペースがある</p>
<p>6月22日 水曜カンファレンス</p> <p>各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、A保育園職員2名</p>	<p>・A保育園職員との交流</p>	<p>・コロナ禍における、異年齢でのかかわりについて話題になった。異年齢でのかかわりは、年上幼児、年下幼児、互いにとってそれぞれ価値のあることだと意見交換した。</p>
<p>6月28日 研修 各クラス担任、 養護教諭</p>	<p>・のびのび保育シートの検討</p>	<p>6/28 のびのび記述検討 <そら組> バッタ バッタにえさをあげたい → えさを知りたいという思いを読み取る。援助への迷い「自分で」という思いを支えたい ・一緒に考える「何食べるんだらうね、図鑑があることを知らせる」「図鑑あるかな？」</p> <p><やま組> カナチヨロ カナチヨロのえさを探す(かかわりの中で) → カナチヨロへの愛着を深めてほしい(この段階で) うみ組J児につなぐ</p> <p><うみ組> ペットボトルロケット 「あんまり飛ばないね」 → 先生も入れて、仲間になる、今までやったことのない遊びの遊ぶ方法でやってみてに出会って、自分達で「やってみよう」「やりたいたい」につなげていこう。自発的な遊び</p>
<p>6月29日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員</p>	<p>・期の振り返り ・環境構成について</p>	<p>・各クラスごとに行った期の振り返りでの情報を共有した。3歳クラスでは、幼児が安心して楽しく過ごせるように、4歳クラスでは幼児が新しい環境になじむように、5歳クラスでは年下幼児や同年齢の幼児とのかかわりをつなぐ援助や環境構成について振り返った。また、どのクラスも幼児理解することを核として援助を考えてきたことが共有された。</p> <p>・暑さが幼児の遊びの妨げにならないように、また、プール設置によって5歳クラス児の遊びが見えなくなってしまったという話から、園庭の環境を見直した。自転車置き場を変え、テーブルを3・4歳児がよく見える場にも設置した。</p>

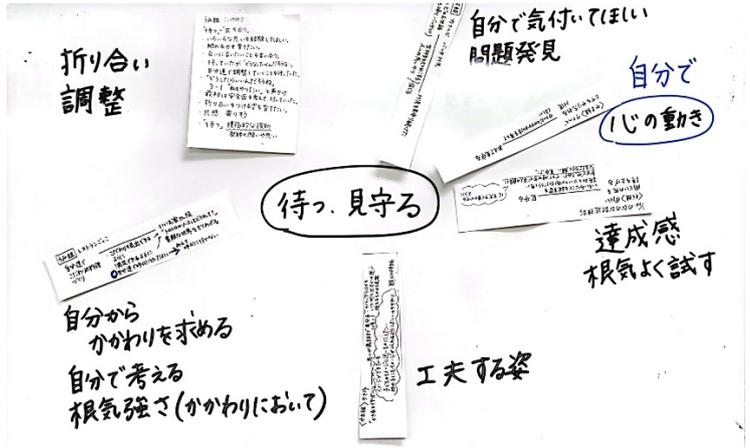
<p>7月6日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員</p>	<p>・公共施設でのマナーについて</p>	<p>・七夕遠足での様子を共有し、公共のマナーについてどのように幼児に伝えていくかを意見交換した。「～してはいけない」という注意ではなく、幼児が自ら気付けるような声かけを大切にしていこうと確認した。</p>
<p>7月6日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<p>・のびのび保育シートの検討</p>	<p>7/6 のびのび記述検討</p> <p>〈そら組〉ブルーベリー プール前に何となく _____ 種まき すじている幼児 _____ 「たけのこ。どうなっているかな？」 木の奥を通して遊びの _____ きっかけづくり 広がりをお願い。</p> <p>〈やま組〉カナヘビ エサをやり忘れる _____ あえて見守る H見 _____ カナヘビとかかわり方を考えてほしい</p> <p>〈うみ組〉レストランごっこ いつものように教師が _____ 「持ち帰りできますか？」 お客様で呼ばれる _____ つなぐ 教師以外の人とかかわる 楽しさや充実感を思い出してほしい (プールの設置により、内と外が) つながりにくくなった</p>
<p>7月12日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<p>・のびのび保育シートの検討</p>	<p>〈そら組〉 バッタつかまえる B組 「どんな袋にする？」 「なんで死んだんだらうわ？」 「自分の実感と」 「また種が後に」 「出た」</p> <p>〈やま組〉 カナヘビ バッタH見 カナヘビのお世話 _____ H見を見守り続けた (持ち帰り、バッタと) 生き物を大切に} 信じる 人への思いやり</p> <p>〈うみ組〉 レストランごっこ 自分選で _____ いいお客様役 「トロロのソースはどうやめ？」 「素敵な世界をもちあげる」 「あえて」 「呼びに行かない」</p>
<p>7月13日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員</p>	<p>・1学期の振り返り</p>	<p>・各クラスでの幼児の育ちの姿や教師自身の学びについて、話題になった。</p>
<p>7月14日 交流 3歳クラス担任</p>	<p>・B幼稚園の定期公開保育に参加(於：B幼稚園)</p>	<p>・幼児の思いから遊びが発展していった経緯などを聞き、幼児主体の保育に共感した。</p>

<p>7月19日 研修 各クラス担任、 養護教諭</p>	<p>・のびのび保育シートの検討</p>	
<p>7月20日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員</p>	<p>・5歳クラスのエピソード事例を元に援助のイメージを共有する</p>	<p>・「待つ」「見守る」援助について、各教師がどんなイメージをもっているのか、またどんな子どもの姿を願って援助を行っているのかを共有した。</p>
<p>7月20日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者</p>	<p>・研究の進捗状況について</p>	<p>・実践を言語化し、他者と共有していくことが本研究の大切なところだということを確認した。 ・1つ1つの事例を丁寧に扱い、見ている分からないことを言語化していくことで、他者にも伝わるものを目指していく。</p>

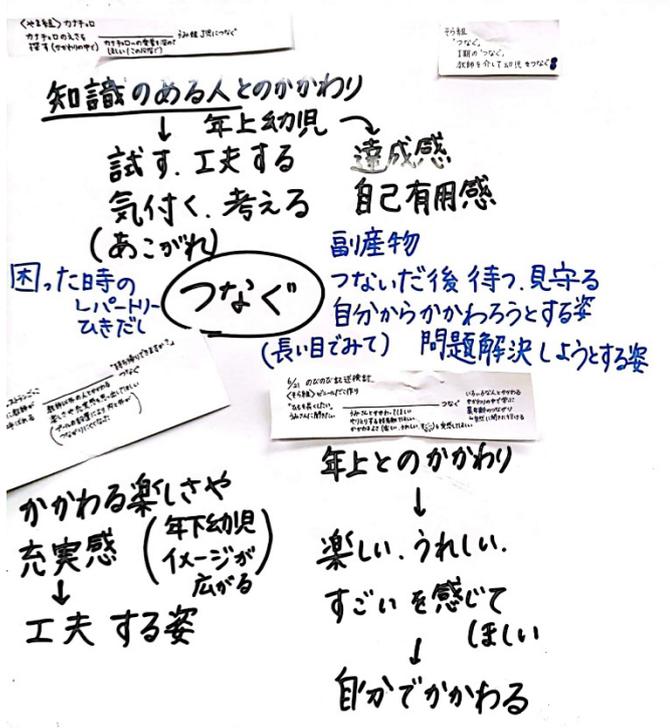
7月27日
研修
各クラス担任、
養護教諭

・集積した事例の分類・検討

・「待つ・見守る」援助の事例を整理し、どんな「まなざし」で教師は「待つ・見守る」援助をしていたのかを確認した。



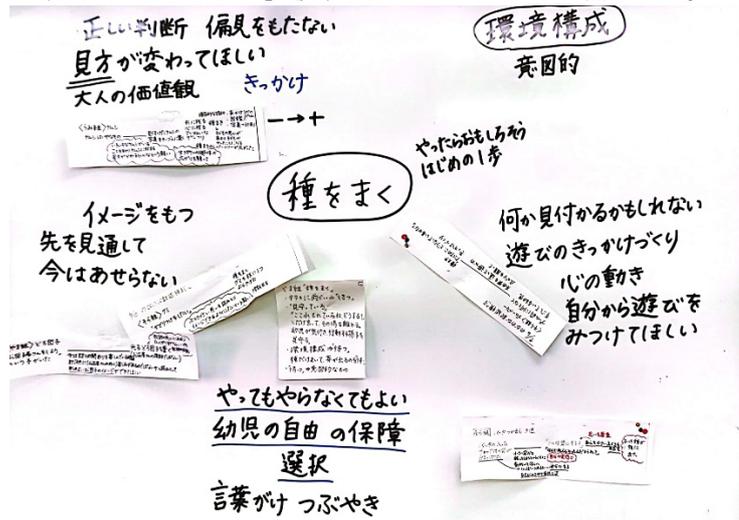
・「つなぐ」援助の事例を整理し、どんな「まなざし」で教師は「つなぐ」援助をしていたのかを確認した。



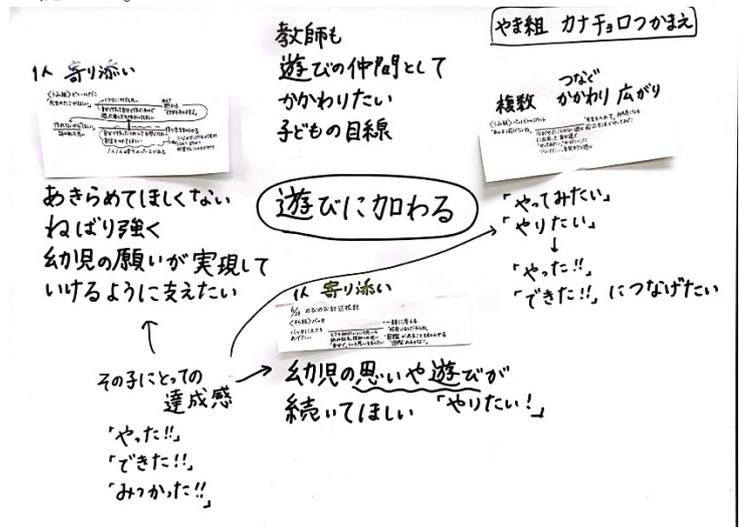
7月29日
研修
各クラス担任、
養護教諭

・集積した事例の分類・検討

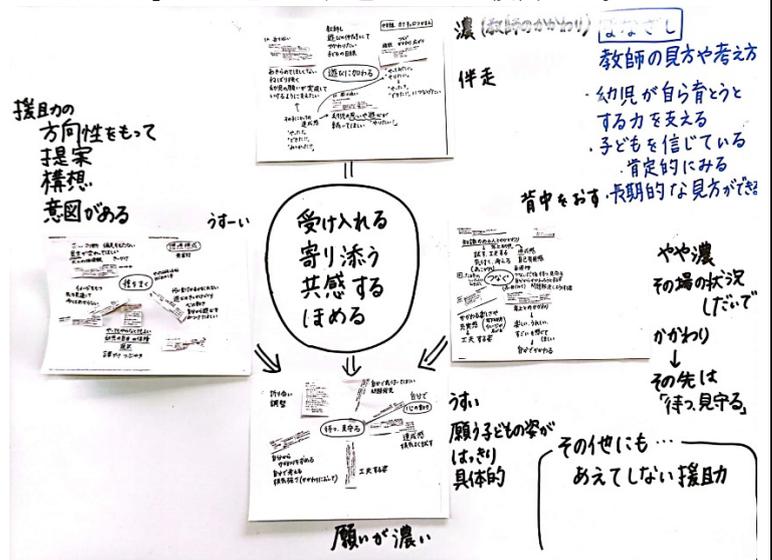
・「種をまく」援助の事例を整理し、どんな「まなざし」で教師は「種をまく」援助をしていたのかを確認した。



・「遊びに加わる」援助の事例を整理し、どんな「まなざし」で教師は「遊びに加わる」援助をしていたのかを確認した。



・4つの援助「待つ・見守る」「つなぐ」「種をまく」「遊びに加わる」の共通点や相違点などを検討した。



<p>8月1日 Cこども園との交流 3歳児クラス担任、5歳児クラス担任</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・Cこども園との交流（於：Cこども園） 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の思いに寄り添った言葉かけを心がけている点や幼児同士が思いを伝え合う場を大切にしている点などに共感した。
<p>8月1日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・エピソード検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスのエピソードを読み合い、前の期のエピソードを踏まえ、内容や記述について検討した。
<p>8月3日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大カンファレンス資料検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・援助の在り方のまとめ部分を、再度検討することを確認した。
<p>8月5日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・援助の分類の整理とまとめ 	
<p>8月8日 研修 各クラス担任、養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大カンファレンス資料検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・OODAループでまとめることにした。
<p>8月9日 拡大カンファレンス 各クラス担任・副担任、6名来園</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「附属園の教育を他校種の立場から見て、どう思うか」「附属園の教育は幼小中の連続した育ちにつながっていくと思うか」とテーマでカンファレンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼小中の接続については、カリキュラムづくりに目が向きがちだが、カリキュラムをつくってもそこに心がなかったら、意味をなさない。教師一人一人が持っている子どもにどう育ててほしいのかという心もちがたがっていきと接続も前進していくのではないかという話があった。 ・話をするのが大切。子どもの姿を語り、教師の悩みなどを語り、交流する対話が、大切にしたい概念をつくっていくことにつながる。

8月18日 研修 各クラス担任、 養護教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大カンファレンスを受けて、今後の研究の方向性 ・研究会に向けて 	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大カンファレンスはとてもよい学びの場になった。保育者一人一人が考える「まなざし」を共有していくことで見えてくるものがあるのではないか。 ・「待つ・見守る」援助には、必ず前段階があるのではないか。「待つ・見守る」につながる援助とは何かを検討していくことを確認した。
8月25日 研修 各クラス担任、 養護教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・研究会の資料検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・4年次の研究とこれまで3年間の研究との関係を提示できるとよい。
8月25日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者	<ul style="list-style-type: none"> ・拡大カンファレンスについて ・研究会資料の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究会でのプレゼン資料について検討した。 ・本園の考える「まなざし」とは何か、OODAループのどの部分に当たるのかをさらに検討し、今後明確に示していくことを確認した。 ・研究会における保育トークのもちかたについて検討した。
8月31日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教 諭、教育補佐員	<ul style="list-style-type: none"> ・期の振り返りの共有 ・評価観の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスごとに行った期の振り返りでの情報を共有した。3歳クラスでは、幼児がやってみようことをみつけて遊びを楽しめるように援助してきたこと、4歳クラスでは遊びが広がったり、発展したりするように援助してきたこと、5歳クラスでは幼児が試行錯誤しながら遊びに没頭する姿を支えるように援助してきたことが共有された。 ・これまでの援助を振り返り、保育者それぞれが大切にしていることを8つの評価観と照らし合わせて確認した。
9月5日 研修 各クラス担任、 養護教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・「まなざし」について検討 ・ミニ公開保育について 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者それぞれが考える「わたしのまなざし」について比較、検討した。どれも同じような感じの言葉が並んでいることに気付いた。園として同じ方向を向いて保育をしていることにつながっている。 ・ミニ公開保育やその後のカンファレンスの流れを確認し、共通理解を図った。
9月7日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教 諭、教育補佐 員、A保育園職 員2名、	<ul style="list-style-type: none"> ・「わたしのまなざし」の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者一人一人が考える「わたしのまなざし」を確認し、それらの共通点を検討した。 ・「ありのままを受け入れる」「肯定的」などの共通点が見出された。 ・「わたしのまなざし」を通して、同じ思いで保育に向かっていること、カンファレンスを通して、自分の主観だけでなく多様な目で幼児を見ていることについて、語られた。

9月7日 保育協議 A保育園保育士 2名、各クラス 担任、養護教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・保育参観や研究のプレゼンを通しての協議 	<ul style="list-style-type: none"> ・「少しのきっかけ」について、意見が交わされた。「少し」は人によって、幼児の年齢によって程度が違うのではないかと。これまでの積み重ねがあるからこそ、「少しのきっかけ」で遊びにつながっていくのではないかと。長期的な積み重ねが必要。
9月15日 研修 各クラス担任、 養護教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・研究会①を終えて 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究協議で研究協力者から出された質問や意見について、検討した。 ・研究発表の中に、具体的な幼児の姿や保育者の援助、カンファレンスについての内容を入れていく。
9月21日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児に出す材や環境構成について 	<ul style="list-style-type: none"> ・例年の遊びの伝承や使っていた材についてよく伝わっていないことが話題になった。それらを情報共有する必要があることについて確認した。
9月26日 研修 各クラス担任、 養護教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼン資料検討 ・「のびのび保育シート」検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼン資料の変更点について検討した。「心もち」や「まなざし」の言葉の使い方について検討した。
10月12日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員、新採用教諭 (新採用研修)	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスの材の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスで使っている材について、実際に各クラスの教材庫を見ながら確認した。 ・他クラスの教材庫を知ることによって、援助の仕方を工夫することにつながっていくことを確認した。
10月19日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員	<ul style="list-style-type: none"> ・異年齢での遊びについて ・なかよし遠足の様子について 	<ul style="list-style-type: none"> ・異年齢でかかわりながら遊ぶ幼児の姿が多く見られていることを確認した。 ・なかよし遠足での異年齢でのかかわりについて、情報交換を行った。
10月26日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員	<ul style="list-style-type: none"> ・ハロウィン遊びについて ・衣装作りについて 	<ul style="list-style-type: none"> ・5歳クラスのハロウィン遊びについて、情報共有した。 ・3歳クラス幼児が衣装を作ってもらうために5歳クラスに行って、衣装を作ってもらい、それを使い捨てるように扱う3歳クラス幼児の様子を共有し、今後5歳クラスで作ってもらったものは、遊び終わったら返すように援助していこうと共通理解した。
11月2日 広島大学附属幼稚園視察 3歳クラス担任	<ul style="list-style-type: none"> ・屋外の環境構成について 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児がやりたいことを楽しめるように、屋外での環境構成の工夫や教師同士の連携に共感した。

11月16日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	・ 幼児の遊びの様子	・ ちびっこ砦の使い方について、幼児の遊びの様子を踏まえて、確認した。 ・ おにごっこのバリア場になっている状況から、安全面を考え、ちびっこ砦でけがをした幼児がいたことを伝えながら、幼児がちびっこ砦でおにごっこをすることの危険性に気付けるように援助していくことを確認した。
11月24日 研修 各クラス担任、養護教諭	・ 研究冊子作成について	・ 研究冊子作成に向けて、冊子のページ数や内容を検討した。12ページ構成で、来年度の研究につながるように紙面構成を行う。
11月30日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、院生1名参加	・ 長期的な育ちについて	・ 大人の言葉で、大人の価値観を幼児に植え付けてしまうことがあることを確認し、言葉の選び方や言葉のかけ方の大切さを改めて考えた。 ・ 大人が幼児にどのようにかかわっているかを幼児はよく見ていて、それを真似している。大人が繰り返し肯定的な言葉をかけ続けることが、幼児の言葉として出てきていることを共有した。
12月7日 水曜カンファレンス 3・4歳児クラス担任、副担任3名、教育補佐員、預かり保育職員1名	・ 幼児理解を深める	・ 幼児の遊びの様子や保育者の言葉かけの様子を動画で見ながら、それぞれの思いを語った。大人の価値観で物事を見るのではなく、幼児の思いを大切にしたいかかわりが大切だと改めて確認した。
12月13日 保育参観 カンファレンス 各クラス担任、副担任、小学校教頭、介護員1名	・ 片付けや切り替え場面での言葉かけについて	・ 片付けや切り替え場面において困り感を感じている小学校介護員の先生の話聞き、普段大切にしていることや実践していることを語った。幼児の思いを聞くことや幼児と一緒に片付けを楽しむことなどが話題にあがった。
12月21日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	・ 幼児理解を深める	・ 幼児の最近の様子を情報交換した。教師の言葉のかけ方ひとつで、幼児の反応が変わってくることを確認し、幼児の思いを引き出し、受け止めるような言葉かけをしていこうと共通理解した。
12月26日 拡大カンファレンス 各クラス担任・副担任、6名来園	・ 「校種を超えて教育観をつなぐための教師の役割は何か」「子ども中心のくらしづくりの環境をどう整えるか」というテーマでカンファレンス	・ 教師は子どもが心を動かすような体験と出会い、学びを自らつくっていけるような環境を整えることや子どもの姿を学びとして意味づけ、カリキュラムをつくりかえていくことが大きな役割だと共有された。

<p>1月10日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめの確認 ・来年度の研究の方向性について 	<ul style="list-style-type: none"> ・カンファレンスを積み上げてきたことによって、暗黙の了解とされていたことが明らかになってきたこと、その具体的な内容について研究冊子にまとめることを確認した。 ・研究冊子に掲載する内容は、情報を精選し、具体的でわかりやすい内容にする必要があることを確認した。 ・来年度の研究の方向性としては、他園・他校種との交流を充実させ、「子ども主体の保育」について、情報交換したり、情報を共有したりして、保育の質の向上につなげていこうと確認した。
<p>1月18日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもを支える保育者の思い」を振り返る 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者一人一人が自分の保育を振り返り、どんな思いをもって子どもを支えようとしてきたのかを記述した。
<p>1月20日 研修 各クラス担任、 養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究冊子の内容検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・副担任や教育補佐員の思いを聞き取り、研究冊子に掲載することを確認した。
<p>2月7日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究について 	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究では、他園との交流が核になることから、今年度末から動き出す必要がある。 ・来年度は研究1年目という位置づけで、試行錯誤しながら、交流のしくみづくりをメインにしていくことを確認した。
<p>2月28日 研究 各クラス担任、 養護教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究に向けたチラシ配布について 	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度研究で交流する園を募集するためのチラシ作成について、カンファレンスの様子が伝わるような内容と具体的な日程をいれ、気軽に連絡をもらえるように工夫することを確認した。
<p>3月1日 水曜カンファレンス 各クラス担任・ 副担任、養護教諭、 教育補佐員、大学院生1 名</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最近の保育について 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児同士がぶつかる場面について話題になった。幼児が自分の思いを素直に表現できる環境を保障することが大切で、教師がその思いを受け止め、受け入れることを繰り返しているからこそ、幼児は安心して自分の思いを表現できるようになっているのではないかと。教師の姿を見ているからこそ、幼児同士でも納得できるようなかわりができるのではないかと感想があった。
<p>3月9日 研修 各クラス担任、 養護教諭、研究 協力者</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究について 	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究で交流する園の募集には、チラシの他に、SNSやHPなど、インターネット上で情報発信していく必要がある。 ・HPを整備し、本園の取組や交流の概要について情報を得られるようにしておくことで、交流につながるようにしていく。 ・交流後の情報発信の仕方について、検討した。